

# 国語教材化の問題

— 明治 20 年代の世相と文学を軸に —

佐藤 毅\*

## 1 はじめに

明治 20 年代の文学作品が現代においてどれほどの感動を与えうるかという疑問は一見正当な疑問のようでもあり、また反面、愚かな疑問でもある。辞書をひかなければ分からないような言葉の群れと異なる時代の思潮や風俗に苦しむよりも現在進行形の形で同時代を表現している文学作品の方が、感動を与える確率が高いことは確かである。その反面、時代の流れの中で生き延びた文学作品のみが持ちうる価値も十分に考えなければならないことも真実である。文学の普遍性とは時代の淘汰を切り抜けた部分にこそあると考えれば、文学とはある意味で古くなくてはならないという側面も持つ。未生から未完への文学の道程を象徴する事象かも知れない。

さて、感動するという行為は、その作品を如何に主体的に受け止めるかという姿勢にかかっている。その場合、もっとも難解なことは、その時代の感覚を現代において共有しうるかどうかということである。文学は観念の産物という側面を大きく持つが、常に作者の生活体験ないし実感という形而下の部分に支配されている。その個人的世界が何をもって時代を超える普遍性を持ちうるのだろうか。これは過去の文学作品を見て行く上で、常に念頭に置いて行かなければならない。作品の持つ個人性や時代性を無視して現代に通用する部

分だけを見て行けば、当然のことながら曲学の誹りを免れない。その意味から言葉の壁を破る作業も必要になるし、時代的な感覚のずれも埋めて行く作業も加わってくる。

その適例として、本論では明治 20 年代文学の北村透谷をどう捉え、また国語教材としてどのような可能性と問題点があるか考えてみたい。

## 2 明治 20 年代の社会現実

明治 20 年代で記憶しなければならないことは、まず明治 17 年から明治 21 年までのドイツ留学を経て帰国した森鷗外存在である。

近代日本文学の黎明を凡そ明治二十年ごろと見ようとする事は賛成である。二十年頃までは変革後の動乱の名残りで国民生活の関心はすべて政治経済その他の外面的な方面にのみ向けられて、専ら衣食を求めに急で、まだ礼節を云ひ文化を説くに到らず、唯一の思想が功利的な啓蒙思想、唯一の文学が政治小説といふ程度からぼつぼつ本当の文学が生れようといふ段取になるには二十年近くかかったのは自然の理である。それ故その年代に近いあたりの目ぼしい文学的業績を物色して十八年の「小説神髓」と二十年の「浮雲」とを合はせ数へてここに紀元を置かうとするのも亦一説であらう。まことによく考へたとは思ふ。

この引用は、佐藤春夫の「森鷗外のロマンティズム」（「群像」昭和 24 年）の一節である。こ

2009 年 11 月 30 日受付

\* 江戸川大学 マス・コミュニケーション学科教授 日本文学（近世・近代）

の論文の中で佐藤春夫が、森鷗外の出現をもって近代日本文学の紀元としたいと語っていることは、すでに周知のところである。この森鷗外と既に作家的出発を遂げていた坪内逍遙との間に行われた「没理想論争」は、内的世界の問題を白日のもとに出す役割を十分に果たしたが、一般大衆に自我の覚醒を啓蒙するような内容ではなかった。むしろこの時代にあっては、キリスト教の運動の方が、その啓蒙活動として有力なものであった。聖書と近代文学の相関関係について詳細されたものは多くある。それらは表層的な受容は勿論のこと内面的な覚醒の契機をその宗教体験において論じている。巖本善治、徳富蘇峯、植村正久等のいわゆるキリスト教の信者は、西欧文学とそこから派生する理想主義の理念によって日本文学の卑俗さと低調さを正そうとした。しかし、このような形で文学に臨んだ場合、当然のことながら文学の自立性は守られない。結局、近づこうとすればするほど離れてしまうことになる。しかし、文学そのものを主目的にするか、あるいは文学を何物かの達成のための手段とするかは別として、近代的な文学精神の芽になり得たことは事実である。

この延長線上に『文学界』同人の運動を見出せる。社会の関心は外面的、物質的なものに集中し、文壇は開化という近代主義の反動として保守的な擬古典主義の硯友社一派が出現した。それに対し『文学界』同人は、内面的な精神生活へと視点を向け、消閑の具としての文学、あるいは政治的、功利的な文学から独自の文学価値を意識することになった。彼らはキリスト教の影響とか西欧文学への傾斜と言われる欧化主義の側面が目されがちであるが、日本の古典文学にも十分に愛着と憧憬を示していた。つまり、日本の伝統文学と西欧文学という東西両文学の総合的な発展という近代文学のもっとも大きな課題に、意欲的にまた意識的に立ち向かったのである。その同人たちの中でもっとも中心的な位置を占めた人物が北村透谷であった。

北村透谷の大きな特色は、形而上的な思考に没入する反面、現実世界との非常に激しい相剋があることである。それは取りも直さず彼の理想と現

実世界があまりにも隔たっていたことに起因する。

ここで彼を現実にも苦しめていた状況を少し見てもみよう。

明治11年5月、大久保利通は暗殺されるその日の朝、訪ねて来た福島県令に次のように語ったと伝えられる。

維新の盛意を貫徹するには三十年を必要とする、私は考えていた。明治元年から十年までを第一期とするが、これは兵事が多く創業の時期である。十一年から二十年までの第二期は、内治を整え、民産を増加する時期である。自分は十分に内務卿の職責をつくしたい。二十一年から三十年にいたる第三期は、後進賢者が継承修飾するのを期待したい。

この言葉の中に、明治の権力を握ったものの自信を見る。明治10年をして兵事創業の時期は終わった。しかるにどのような反政府運動も問題でないとする、この自信こそ近代日本の栄光であるとともに暗闇をも意味している。この予言通り明治政府は着々とその権力を不動のものとして行った。徴兵令改正、教育令改正、官営工場私下概則制定と立て続けに内政の確立に力を注ぎ、海外諸列国との対峙に備えた。その過程から松方デフレ政策等の経済政策もある。農民分解が急速に進む中で、地主と小作人の階級対立は激化し、地主階級は当然のように権力側に立つことになった。自由民権派を支援し、また自らも自由民権派を自認する豪農地主たちも例外ではなかった。財政難に陥った自由民権運動は、より過激な行動へと進み、加波山、群馬、秩父、飯田、名古屋の一連の事件へと発展する。この悪循環は、単純に政策の問題だけでなく、日本近代化の矛盾の露呈であった。この悪循環のひとつとして武相困民党の一群がある。

明治17年11月19日、武相(武蔵・相模)の心ある人々は、代表を送り、相模原に集結して武相困民党を正式に発足させた。このとき唯一の自由黨員として参加した若林高之介の起草した決議案が採択され、22名の新指導者を選出した。そ

の指導部の大半は小豪農か中農であった。前述した地主と小作農の階級闘争と呼応する形がここに見られる。つまり権力側と手を結ばなければ、これからの明治近代主義体制に付いて行けないとして、大半の豪農地主たちは小作人との闘争を経て権力側へと移動した。その時勢に遅れた豪農たちは、自由党が中央の政治権力の力学に疲弊した段階に至っても自由民権運動に加わらざるを得なかった。しかし、中央の党がどうあろうと、思想が有ろうと無かろうと、動かざるを得ない逼迫した現状がそこにあった。

板垣退助が主導する自由民権運動の上層部は、国会開設運動が主流であった。それは単純化すれば薩摩・長州主導の藩閥政治に対して土佐出身の板垣退助の不満から発した部分が多い。それらのプロパガンダの材料として政治小説の隆盛があるが、そこに示されたのは、あくまで政治抗争の手段としての文学であり、啓蒙であった。つまり知識人としての自負に裏打ちされた上から目線になる文学であった。

それに対して、松方財政下のもとで農民や一般庶民の生活は貧困を窮め、その解決策が単純に国会開設によって解決できるようなものではなかった。武相の農民もまた例外ではなかった。生活苦の中で負債を背負い込んだ農民にできることは、直接行動以外にはなかったのである。武相困民党結成の半年前にいわゆる露木事件と呼ばれる事件があった。それは露木卯三郎という金貸しに対し、竹槍や箆旗を持って襲い、殺害に及んだ事件である。明治18年6月27日、大審院は全員死刑を確定し、同年8月15日、横浜戸部監獄で執行された。その露木事件にこそ武相困民党の原型が内在していると考えられる。色川大吉や大畑哲の指摘するように武相困民党の大きな目的は、負債の大幅な帳消し運動であった。外貨獲得のために養蚕業への転換を奨励し、横浜港につながる武相、山梨、埼玉、栃木、群馬、長野の農民は、田畑を桑畑に作変えし、一時は開化景気に酔ったが、その暴落によって多くの農民は破綻した。この時期の農民決起事件の大半は、この明治政府の経済、農政対策の見誤りに起因するものであった。

農民の苦悩をそのままにした明治政府の経済政策の失敗は、末端の農民に辛酸を嘗めさせることになる。この運動に参加した人々の願いは、常に思想を超えたものであり、名もない者たちの祈りに近いものであった。そしてこの武相困民党も権力の前に屈せざるを得なかった。

明治18年1月15日、南多摩郡長である原豊稔は、武相の人々が最後まで死守していた組織も指導者も崩壊させ、参加した人々も自由党員も深い挫折感を抱くことになった。ここに至って理想と情熱をかけた人々のエネルギーはどこに転用すべきか分からなくなったのである。その時期に朝鮮半島で清からの圧迫に抵抗すべく改革運動が始まっていた。日本における朝鮮半島対策は、豊臣秀吉の朝鮮出兵にしても西郷隆盛の征韓論にしても内政問題の解決策としての要素を多分に含んでいる。たとえば西郷隆盛の征韓論は、単純な海外覇権ではなく、江戸幕府崩壊による多くの士族の行末を案じ、また不平士族の相次ぐ騒乱を解決するための手法であった。また、昭和の満州開拓の政策にも農政失策の解決策を海外に求めた結果がその真相であった。

自由民権運動の末期的過激分子の動向と一般庶民の反政府的雰囲気警戒していた明治政府が国内から国外へと国民の関心を逸らそうとする策に呼応する動きを皮肉にも民権派が率先してしまうことになる。それら過激分子は、大井憲太郎を中心とした朝鮮改革運動へと集結することになる。ここで想起させられるのは、あの大久保利通の予言である。この朝鮮改革運動は、まさに大久保利通の予言通り政府の掌の内で進められ、そして終結し、内治は整うことになる

蓋し維新革命の精神、即ち五条立誓の皇謨は、内に在て立憲政体の美を濟し、国民統一の基礎を開き、億兆をして国家の興衰と憂戚を同ふせしめんとするに存せるのみならず、実に其統一せる国民の力を擁して直ちに開国進取の計を執り、万里の波濤を拓拓し、東洋の平和を確立せんとするに存せるや疑ふべからず。

右のように朝鮮改革運動を説く人々にとって真のナショナリズムと帝国主義の区別はなかった。現在では資本主義の発達過程における帝国主義の概念は、経済学や歴史学によって明確になったが、当時のもっとも急進的な左派と呼ばれる人々でさえも疑問を持たずに集結したのである。渡韓を果たすべく、不法な資金調達に繰り返され、兵器製造まで行っていた。その劫掠運動とも呼ばれた資金調達は、「勢の駆る所死士をして盗児たるを忌まざらしむ」といった状態であった。しかし、渡韓を目前にした11月23日の暁、その陰謀は大阪で発覚し、大井憲太郎、小林樟雄以下すべてが捕らわれ、その数は130余名であった。世に言う大阪事件である。嫌疑者は大阪重罪裁判所へ移送されたが、その中には景山英子や大矢正夫たちの名もある。かくして大久保利通の予言通り明治20年代へと突き進むことになった。大矢正夫（蒼海）は、北村透谷と親交を結んだ仲である。その頃の回想として北村透谷は「三日幻境」に次のように記している。

蒼海は幾多の少年壯士を率ゐて朝鮮の挙に与らんとし、老崎人（秋山国三郎）も亦た各国の点取に雷名を轟かしたる秀逸の吟詠を廃して、自村の興廃に関するべき大事に眉をひそむるを見たり。この時に至りて我は既に政界の醜状を悪くむの念漸く専らにして、把つて義友と事を共にするの志よりも、静かに白雲を趁ふて千峰万峰を攀づるの談興に耽るの思望大なりければ、義友を失ふの悲しみは胸に余りしかども、私かに我が去就を紛々たる政界の外に置かんとは定めぬ。

本論では幾度となく「権力」という言葉を使用した。そしてその「権力」に破れ、血涙を流しながら屈服した人々を思い浮かべた。しかし、その権力闘争に敗れたものは、逆に「勝てば官軍、負ければ賊軍」という構図を熟知していたからこそその情熱であったかも知れない。ここにあるのは権力側と反権力側の二つの志向だけである。しかし、その二つの志向に含まれない人々の群像がある。

困窮の中で土地を失った人々、餓死して行く人々、貧窮から娘を身売りさせなければならなかった農民、思想とか政治には全く無縁で毎日の窮乏に俯くしかなかった人々、貧しさの日々にかすかな幻覚にも等しい希望を見せられて、結果獄死しなければならなかった人々、それらの人々は権力意識もしくは構図の外側に位置する人々であった。北村透谷が思い定めた「我が去就を紛々たる政界の外に置かんとは定めぬ」という姿勢は、偶然にも歴史の本質を見抜くことになったのである。

歴史は、常に明るい部分とその反面の暗い部分しか映し出しはしない。常に生き、常に生活し、苦しいときは天を見つめて叫ぶしかない人々が、いつの時代にも存在していたことを歴史は記さない。その空白部分を埋めるものは、主観的な想像力の力だけである。確かに近代という時代は歴史的に客観性を持った言葉である。しかし、真の近代史観は各種の権力闘争の外側に存在する無数の民衆を見つめることから始まるに相違ない。柳田國男の語る常民史観などは、その代表的なものである。その時代のダイナミズムを各々の内的な眼によって主観的にとらえるところに近代史観がある。

この現実とこの歴史の仕組みを正確に実感した人物として北村透谷は記憶される。武相困民党の興衰と近代の闇部を見つめ続けた北村透谷は、文学という権力闘争から離反した世界に自立を見出した。そして、外側に在ることによって明確に時代のダイナミズムを把握し、意識化したのである。

### 3 明治文学における北村透谷の意味

夏目漱石の「それから」には「日本国中何所を見渡したって、輝いてる断面は一寸四方も無いじゃないか。悉く暗黒だ」という一節がある。すでに明治は40年を越えた頃の作品である。『文学界』の時代からおおよそ20年近く経ており、加えてイギリス留学を経験した、この時代にあってもっとも高い知識人の独白である。そして北村透谷は、夏目漱石よりもわずか一歳年少にすぎない。夏目漱石は「それから」の主人公長井代助に nil

admirari の心境を語らせながらも最終章で主人公を社会に溶け込ませる。その部分は主人公長井代助の自我も心も焼き尽くそうとするかのような描写となっている。赤い色に彩られた情景描写は、主人公の自我の苦悩が示す残像のようである。明治の文人として双璧をなす森鷗外も、すでに「舞姫」から「うたかたの記」「文づかい」等の初期作品で、時代や社会と自我との確執を吐露している。しかし、夏目漱石の「それから」が発表された時期に至るとその苦悩は、諦念へと変容している。森鷗外の「Resignation の説」である。森鷗外の「舞姫」にも nil admirari の語はあるが、明治 40 年代の Resignation とは本質的に異なる。そのたどり着いた心境は、夏目漱石の「それから」から「門」へとつながる世界と同質であった。その内容は、単に文学史的に高踏派の枠に入るという意味だけで済む問題ではない。森鷗外も夏目漱石もすでに晩年の域に達していた時期であったし、日清、日露の戦争も明治近代化の栄光と矛盾も実際に見つめた末の諦念であったとしたら、北村透谷との差違は単純に時代的な問題であり、年齢的な問題であった。しかし、苦悩を若い時代のものとし、年を経てからは諦念という形になったとしてもその諦念が真理であって、苦悩は若気の至りであったということにはならない。

北村透谷は明治 27 年に自ら世を去った。その激しくも早く去った者のみが語れる言葉は、北村透谷の中にあふれている。そして早く去ることのできなかった者の苦しみと悲しみは、森鷗外にも夏目漱石にもあふれている。その違いを北村透谷の「漫罵」と夏目漱石の「現代日本の開花」に見てみよう。

今の時代は物質的の革命によりてその精神を奪はれつゝあるなり。その革命は内部に於て相容れざる分子の衝突より来りしにあらず。外部の刺激に動かされて来りしものなり。革命にあらず移動なり。人心自ら持重するところある能はず、知らず識らずこの移動の激浪に投じて、自ら殺さざるもの稀なり。

北村透谷の「漫罵」の一節である。明治近代化の矛盾を的確に把握した文章として記憶され、中村光夫の『『移動』の時代』等にも引用された部分である。北村透谷は、前述した大阪事件に参加した大矢正夫とも友人であり、反政府運動にも理解を示していた。しかし、逆にその友人たちに対しても厳しい見方を示している。

彼等の暴を制せんとするは好し、然れども暴を以て暴を制せんとするは、之れ果して何事ぞ、暴を撃つが為めには兵器を掲げて起る可し、然れども其兵器は暴の剣なる可からず、須らく真理の槍なる可きなり、真理を以て戦ふ可し、

この文は、明確に反政府の思考を超えて、時代及び歴史の普遍へと思いは高まっている。それは言うまでもなく「漫罵」の怒りと同質である。

国としての誇負いづくにかある。人種としての尊大異何くにかある。民としての榮譽何くにかある。適ま大声疾呼して、国を誇り民を負むものあれど、彼等は耳を閉ちて之を聞かざるなり。彼等の中に一国としての共通の感情あらず。彼等の中に一民としての共有の花園あらず。

この怒りは決して明治 20 年代のみに終わるものではなく、日本の近現代の持つ一種の宿命のようなものである。そして北村透谷は「今の時代に創造的思想の欠乏せるは思想家の罪なり」と続けるのである。この明治 26 年の文章は、明治 44 年の夏目漱石の次の言葉となって表われる。

西洋の開花（即ち一般の開化）は内発的であって、日本の現代の開化は外発的である。こゝに内発的と云ふのは内から自然に出て発展すると云ふ意味で丁度花が開くやうにおのづから蕾が破れて花卉が外に向ふのを云ひ、又外発的とは外からおつかぶさつた他の力で已むを得ず、一種の形式を取るのを指した積なのです。

時代把握は両者とも全く同様の所にある。しか

し決定的に違うのは、その怒りの大きさにある。明治20年代と明治40年代の時代的相違か、それとも20歳代と40歳代の年齢の差であろうか。私はその双方に怒りが存在する部分と存在しない部分があると考えている。明治の青春と北村透谷の青春は同時期であった。それは明治元年生れという特徴的な性質も大きく手伝っている。夏目漱石も一歳年上であったことを考えれば同様であろう。しかし残されたものが違ふし、書いた時期が明確に違う。それが怒りの大小につながったのである。

歴史とは客観ではなく、各々の内なる世界で追い求め、痛みを分かち合う部分にこそ有ると前述した。その意味では、北村透谷の方により近代という時代の真実を見る。怒りの大きさゆえにそれは信じ得る。「漫罵」と「現代日本の開化」の比較はもっと詳細する機会を待ちたい。

#### 4 北村透谷の教材化の問題とその可能性

今、何故北村透谷か、という問いは何度となく繰り返されている。

国語の教材として北村透谷を扱うことの意味は、明治という時代を正確に見つめることと同義である。そして、その時代の草創期と転換期の狭間に位置したことに、大きな意味がある。外発的な近代化と内発的な近代化の不調和音に苦しみながら挫折した北村透谷の姿は、近代日本の挫折そのものを意味することは疑いない。その近代の挫折こそ現代日本の問題の中核をなすことも、また疑いのない事実である。その意味で、北村透谷の著作を数多く丹念に読み込むことが重要である。しかしそれ以上に、北村透谷の眼をかりて日本の近代の挫折と現代につながる問題点を巨視的に見つめることをねらって教材化を考えなければならない。そのためには、自由民権運動とか近代草創期に果たしたキリスト教の役割とか、文学教育領域、国語教育領域から遠い存在も見つめて行かなければならない。その難しさに加えて、明治20年代の言葉の問題も大きい。それをひとつひとつ克服する時間と余裕が、果たして国語教育の現場である現代国語（現代文）の授業で持てるかどうかは非

常に疑問である。しかし、その過程からしか真の意味の近代も現代も知り得ないことは明らかである。幾多の問題点が考えられるが、それを考え合わせながら教材化の可能性を考えてみたい。

前述したように、明治40年代の夏目漱石・森鷗外の作品群との比較もある程度の成果が期待できる。「それから」を読む時に、明治20年代の北村透谷の近代把握は、20年を経た明治40年代の夏目漱石の内でもどれだけ深化沈潜したか、あるいはどのような形で〈諦念〉を導き出したかという方法も新たな可能性を持っている。また同じ明治20年代に発表された森鷗外の「舞姫」を読む時に、時代のエリートの考え方と在野にある青年との近代把握の相違も新たな「舞姫」の問題点として提示される可能性を持つ。

北村透谷が主として活躍した『文学界』の系列から島崎藤村の問題、あるいは島崎藤村と上田敏の確執に見る明治の青春群像の多様性を見つめて行くことは、日本の近代文学の中心的な問題を見せてくれるはずである。それは島崎藤村の「春」の研究にも関わるし、また時代をさかのぼったテーマである「夜明け前」に示された近代史観とも関わってくる。

近代とは各々の内面で主観として認識することであるとすれば、北村透谷の生き様とその周辺は、まだまだ詳細に見つめ続けなければならない部分が多い。

テキストとしての文学解釈の裏に複雑な社会現象と膨大な人々の思いが錯綜する。国語（文学）教材として単にテキスト論のみで理解を求めるのは難しいことであり、またそのテキストの生成過程を見落とすことは、作者の真意から遠ざかることにもなる。確かに教材は、テキストの形を取らなければならないが、明治草創期文学を論じる場合、そのバックボーンを見なければ誤読の危険性をはらむし、理解度も薄れることになる。しかしながら現代の国語教育に近代日本史の授業をリンクさせるのは非常に困難である。教科ごとの縦割りから教科を横断する教科法を試行しなければ、このような問題を解決することはできない。この部分を抜きにして近代日本文学の授業を構成すれ

ば、端緒の部分に誤読の危険性を含み、やがて夏目漱石や大正文学の芥川龍之介、あるいは昭和の川端康成、太宰治、あるいは三島由紀夫や大江健三郎の読解に至って、その歪みはぬきさしならないものとなる危険性を持つことになる。

1945年8月15日を境に近代日本文学の社会的側面はリセットされたと考えることも可能であるが、やはり深部では継続され日本社会の国際化という部分にその特殊性が露見している。

その一貫した近代人の思考を見つめることなく、単にテキスト解釈に流されることは厳に戒めなければならない。

## 5 国語教育と教材化の問題

現在、国語教育において国際的な学力調査における「読解力の低下」の問題が注目されている。「確かな学力」を形成する基盤としての「国語力

の育成」が打ち出され、「文学や言語文化」の再評価もなされている。しかし、こうした再評価がどのような教育観、言語観、文学観に基づいて行われているのか、その内実が問われる。すべての教科の基本が国語教育にあるという説に異論を挟むつもりはないが、単なる「読み」「書き」「そろばん」的国語教育レベルを歓迎することはできない。読解力の低下は、国語教育の一側面である言語教育のみで解決できるものではない。

それは文学教育との側面と両輪をなさなければならないが、単にテキスト主義や聞こえの良い情操教育の一環というようなものではなく、他教科との横断的教科法を打ち出さない限り、読解力の低下もしくは国語力の低下に歯止めをかけることはできないと考える。

それらの問題を明治草創期の文学は語りかけているように思われる。